『獣人遊郭。～ナンバー1花魁〝銀狼〟の
独占欲丸出し濃厚発情えっち
【初恋×嫉妬執着×相愛SEX】』

キャラクター

名前：銀太　　源氏名：銀（しろがね）
職業：獣人のみの遊廓、牙原（きばわら）のNo.1花魁（おいらん）
年齢・身長：20代前半／178㎝

白銀の毛並みを持つ狼の獣人。
幼馴染のあなたと結婚するために、獣人にとって当時唯一の立身出世の道であった牙原（きばわら）で最高位の花魁になることを決意し、自ら飛び込む。
向上心が高く、自分に厳しい。
客層は幅広いが、色事以上に銀の芸を好む客も多い。
客の要望に応えることに長けており、客を選別して数を絞っているにも関わらず、名実ともに牙原一の人気を誇る。
将来を言い交したあなたが大奥入りしたことを知り、笑うえなくなっていたが、客に媚びを売らないことでますます人気が高まっていく。

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

【あなた】：CVなし

銀太の幼馴染。貧しい武家の娘。

幼少期に銀太と結婚の約束を交わしたが、年頃になり、次々に舞い込む

望まぬ縁談を体よく断るため大奥入り。

数年後、母の具合があまりよくないことを理由に大奥を辞した際、

牙原　で銀太の花魁道中を見る。

16 目次

17
18 1 初恋～プロローグ～ …6
19 2 嫉妬～お前に夢を分けてやろう～ …9
20 3 執着～今宵は、俺をたくさん刻んでやる～ …17
21 4 告白～お前を、抱きたい～ …32
22 5 相愛～隠すな。俺だけのものなのだろう？～ …43
23 6 朝～それから～ …64

24
25
26 語句辞典

27
28 牙原（きばわら）：獣人の男性が色を売る遊郭。
29 吉原を模しており、規模は吉原より小さいものの、盛況。
30 当時、獣人に対する差別は今よりも広く、なかなか実入りの

1　良い仕事はなかったが、牙原で花魁になれば、それなりの地位が約束された。
2　薔薇が名物。
3　大門（おおもん）：牙原の入口にある門。
4　花魁（おいらん）：牙原の男娼の最高位。
5　揚屋（あげや）：男娼を呼んで遊ぶための店。
6　妓楼（ぎろう）・見世（みせ）：男娼たちの所属する店。
7　花魁道中（おいらんどうちゅう）：花魁が見世から客の元に、共のものを引き連れ牙原を歩くこと。「練る」と言う。
8　ほと：女性器のこと。
9　子宮（こつぼ）：膣の奥のこと。
10　淫水（いんすい）：愛液のこと。
11　魔羅（まら）：男性器のこと。
12　鈴口（すずくち）：亀頭の異称。

《Ⅰ．初恋 ～プロローグ～》

（銀の一人語り。物語を読むように、ゆっくりと）

「空の色が藍にかわる頃、牙原大門の木灯篭に、橙色の灯りがともる。
牙原遊郭の幕開けだ。
大門から続く大通り、道沿いに軒を連ねる茶屋、
揚屋の店先の辻行灯に火が入り、
にわかに騒々しく、人々が行きかい、声が飛び、鳴り物が鳴り始める。

ここは、この世で爪弾きにされる獣人の、男だけが働くことの許される場所。
牙原名物の薔薇が咲き乱れる、この華やかな通りのあちこちで、
多額の銭が飛び交い、客の女は、ケモノ男と一夜の夢を買う。
瞬きすれば終わってしまう、その短い夢を差し出すのが、
この場所で生きる俺の役割だ。

毎晩毎晩、違う女に差し出したこの身は、
もう、夢に生きるか、うつつに生きるかもわからなくなってきた。

耳の奥に、ただ一つ確かに残る声がある。
「綺麗だね、素敵だね！ 恰好いいね！」
幼い頃、この牙原へ共に忍び込んで、花魁道中を見た時のあいつの感動の声。
それが、単なる子供の素直な一時の感動の声だったとしても、
あいつと身分違いの獣人である俺にとって、唯一の希望だった。

あいつの憧れる花魁になって、
格好いいと目を輝かせていた花魁道中を成し遂げ、
そして、金子（きんす）を貯めて、…いつかあいつを迎えに行く。

それからもう幾年経ったか。俺は今では、この牙原一の花となった。

決して笑わない銀狼、銀(しろがね)。
不愛想で、客に媚びる事がない、気位の高い牙原一の花魁。

お高く留まっていると陰口を叩かれようと、
それでも俺を一夜呼ぶのに、多くの小判が飛びかう。
俺を買うために、山ほどの女が時を待っている。
この牙原で俺に叶わない望みはない。
…でも、俺の一番欲しいものは、いくら望んでも、もう手に入らない。
それを悟った時から、俺は何のために生きているのかもわからなくなった。

花は抜け殻、中身が空っぽの銀狼。
記憶の中のあいつの声だけが、小さい真珠のように心の中に転がっている」

《2．嫉妬　～お前に夢を分けてやろう～》

（夜更け、銀は昼に行った花魁道中の最中、道にヒロインの姿を見かけて、下の者に頼んで、自分の妓楼に連れてきてもらっていた。銀自身は、花魁道中で出向いた茶屋で、客の女相手に芸をして、宴席に同席したあと、ヒロインを待たせている部屋に戻ってくる）

（正座で座っているヒロインの目の前に座る）

「…待たせたな。宴席を終えるまで、抜けられず、遅くなった」

「（軽い溜息）はあ…、

（ぽつぽつと話す）

…かどわかすも同然のようにここへ連れてきてしまい、すまなかった。

…先ほど、花魁道中のさなか、見物客の中にお前の姿を見かけて、

矢も楯も堪らず…。

気づけばお前を、私の妓楼まで連れてくるよう、伝えていた」

「共にいたのはお前の兄だったな。

…幼い頃に、何度も顔を見ていたから覚えていた。

心配するな。兄上は、下の者に、宿まで送らせた。

お前を今宵、私の妓楼に呼んだことも伝え、金子も渡してある。

宿で美味いものでも食わせてもらっているところだろう」

「（遠い記憶をたどるような、独り言めいた言葉）

…本当に久しいな。…私がこの牙原に入った幼い頃以来だ。

…そう思うと、随分と時が経ったのだな」

「（改めて向き直り、やや硬い声で）

…何故、上様…将軍様の、奥に入ったお前がこんなところにいる。

今日が私の花魁道中だと知って、笑いに来たのか。

1　…首を振って否定しても、私が道中を練ること、知らなかったとは言わせない。
2　今や牙原で花魁道中を練ることが出来るのは、
3　牙原一の花魁たる、この、銀だけだ。
4　牙原の顔となった私の事を、いくら大奥に入ったお前とて、
5　耳にしないわけではないだろう」
6
7　ヒロイン:「凄いね、牙原一の花魁なんて」
8
9　「(やや憎々し気に)
10　…何がすごい。
11　お前がそれを言うのは、ただの皮肉だと、わかっているのか？
12　この牙原に足を踏み入れ、芸事を磨き、技を磨き、
13　そうしてこの遊郭の頂点にたどり着いたのは、確かに私の望みだ。
14
15

…だが、それが…ッ
何のためだったか…ッ…はあ…っ

（独り言のように）
…幼い頃の約束など、お前には意味のなかったことなのだろうな」

「いや…お前を責めるつもりはない。
すべてはこの、獣の身が招いた事だ。
…俺が、身分を得ていれば…
せめて、狼の血を持たず、人として生を受けていれば…っはあ…っ、
違ったことだったのかもしれないな。
…どちらにしろ、どうすることもできぬ話」

「お前とは…もう、…会うことは無いと思っていた。
将軍様の奥に入った女に、かたや遊郭の獣人、

どうあっても相まみえる機会などない。

私と過ごしたのは、幼い頃の一時の思い出、
それだけでもお前の中に残っていればよい。
…それでもう…良いと思っていたんだ。
…それなのに…」

（脅し聞くように顔をぐっと寄せ）
「…何故、牙原にきた。
私を…俺を、笑いに来たんじゃないというなら、
お前も他の女たちのように、夢を買いに来たのか？
大奥は、出入りに厳しいと聞いたが…
それをおしてでも、牙原の獣達の味を知りたかったのか？」

ヒロイン：「違うよ」

「（聞く耳を持たず）
くくっ、ならば俺が相手をしてやろう。
俺は、牙原遊郭一の花魁だ。
芸事に限らず、寝所の技も牙原一と名高い。
将軍様の味を知るお前でも、充分に満足させてやれるだろうよ。
俺と一夜を共にしたい女どもは、二年先まで列を成しているが、
今宵は昔なじみの縁だ、特別にお前に夢をわけてやろう…」

「口を開け…」

★強引に唇を擦れ合わせるキス

「…くすっ…こんな淡いロづけ一つで、随分初心（うぶ）な顔をする。
夜な夜な将軍に可愛がられているんだろうに」

1
2　ヒロイン:「誤解だよ。話を聞いて」
3
4「…誤解？　はっ、今更、何を誤解することがある。
5お前は今や、将軍の…他の男の女だ。
6…お前みたいな女を目の前にして、奮い立たない男などいない…ッ
7…はあ…ッくそ…ッ」
8
9★自分で口にして嫉妬し、そのままキス
10
11「はあっ、はあっ、はあっ、はあ…ッはあ…ッ、
12…俺を…ッん…ッ見ろ…ッ
13
14…この一夜（ひとよ）、この一度（ひとたび）。
15…夢の中でも、お前を抱くのは誰なのか、

16 しっかりと、そのまなこを開いて見て、
17 そして…体中で味わうといい…ッ」
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

《3．執着 ～今宵は、俺をたくさん刻んでやる～》

（トラック2の続き、既に畳の上へ正常位に押し倒した態勢で、キスをしているところから）

（正常位、覆いかぶさり顔を寄せている）

★唇、頬に何回か、こめかみ、など顔中にキス

「ん…っ、はあっ、

ああ…お前は、どこにロづけても、蕩けた顔をするな。

綺麗なのに可愛らしい。…くくっ、将軍様もさぞやご満足されただろうよ

…さて、ここは…、」

（耳に吹き込むように）

「ちゅっ、耳だ。…耳にロづけられたことはあるか？

…くすっ、ないのか。

その割にはここでこうして、
俺が話すだけで、随分と敏感に感じているようだが。」

ヒロイン:「銀太の声…」

「…銀太の声…はあ…その名前で呼ばれるのは、本当に久しいことだ。
…本当なら、銀(しろがね)と、呼ばせるべきなのは…わかっているが…。
俺にとっても、今日は一夜の夢。…銀太と、もう一度呼んでくれ。

…ん…、素直だな。…素直なお前には、ご褒美だ」

「(★耳にキス)

ちゅっ、はあ…っ、ちゅっ…ッ、ん、ちゅっ、

…耳を、啄(つば)むだけじゃ…褒美には足らないな…？
くす、もっと…よくしてやろう…」

★耳舐め、たっぷりと余裕をもって汁気多めに

「ッはあっ…
はあ…っはあ…っ、ああ…刺激が強かったか？」

「ああ…びくびく震えて…可愛らしいことだ。

（状況をゆっくりと説明）
…こうして、俺の身体に上から覆いかぶさられ、閉じ込められて…、
耳の奥を擽(くすぐ)る様に、声を吹き込まれ…舐めつくされて…、
頭の中まで、どんどんと俺が、侵食してくるようだろう…？」

「…くすっ、顔をそむけても、俺の、長い銀の髪しか見えないはずだ。

…それに、俺は獣人だからな、両腕でお前を抱え込んでいても…ほら…、

くすくす、お前の足、ふくらはぎを、

ゆ…っくりと、撫でているのが何だかわかるか？

俺の、尻尾だ。…ふうわりとした毛の、長い狼の尻尾。

こうして、お前の身体中を、

…今宵は俺が支配しているんだと、教えてやれる。

（低く甘い囁きで）

…今は…この夜だけは、俺はお前のすべてだ…」

「さあ、今度はこちらの耳だ…」

★再びの耳舐め、前に同じくねっとりたっぷりと

「…ん、こちらの耳も弱いな…
ああ、膝ががくがくと震えているじゃないか。
ほうら、尻尾がたどるたびに…びくりびくりと大きく跳ねて。
股の奥が、切ないんだろう…？
…もう男を知る場所だ、濡れ方もちゃんとわかっているんだろうな…」

「ああ…、ほら、もうべっとりと、濡れそぼっている。
はあ…ッ、熱い淫水(いんすい)が、とろとろに溢れて…っはあ…ッ、
ほら、聞こえるだろう？
はあ…ッくちゃくちゃと、粘った音が立つほどだ」

「…こんなに熟(う)れるように仕込まれているなんてな…、はあ…ッ」

ヒロイン:「仕込まれてなんかない」

「…仕込まれていない？
ああ…そういうことにしたいのか。
くす、ならばそれでもいい。
このとろりと仕上がった『ほと』に、今宵は、俺をたくさん刻んでやる。
ほうら…指が、入っていくぞ…」

「…ッん…っ、はあ…、ああ…中が…ッはあ…ッ、随分と狭い…ッ
はあ…ッだが、熱くて…ッ！
はあ…ッ指が、ふやけてしまいそうだ…っ、
はあ…っはあ…っ、はあ…っ、はあ…っ」

（上から見下ろすように）
「それにしても、これほど狭いとは…、
これで、俺の魔羅（まら）を咥え込めるか…？

1 しっかりと、指で慣らしておいてやらねばな…、はあ…っ、
2 …ん…ッ、ああ、ほうら…、ここだ、この浅いところ…っんっ！」
3
4 「ははっ、指でなぞっただけで、随分良い反応をする。
5 …この、ざらついた場所を擦ると…、堪らなくなるだろう？
6 ああ、また、どっぷりと淫水を漏らして…っ、はあ…っ、
7 もっと、擦ってやらなければならないな…っ、ん…っ、
8 はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ」
9
10 「…中のこわばりが溶けてきたようだな…っ、はあ…っ、はあ…っ、
11
12 （だんだんと昂奮高まる銀、中の感触にこらえきれず生唾を呑む）
13 ああ、…ごくっ、…
14 随分と…『ほと』の中がうねって…っ、んっ！
15 もう、指では、物足らないのだろう？

ん…っ、ん…、はあ…っ、そろそろ…俺の魔羅を、
代わりに食わせてやろうな…」

「（下着から取り出したペニスを扱(しご)いて、ヒロインに見せつけていく）
はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
…見ろ、俺の魔羅だ。くす、驚いた顔をしている。

…花魁として着飾っているからな。オスの匂いが薄くも見えるのだろうが、
俺の魔羅は、女の『ほと』を喜ばすには十分強い」

「腹の上にあてると…
お前の、臍の近くまで、入るのだとわかるだろう？
はあ…っ、さあ…、力を抜け。…ほら、俺の…首を抱いているといい」

1
2（顔を覗き込む位置）
3「…震えているのか？」
4
5　ヒロイン：「初めてだから・・」
6
7「初めて？ ああ…、そう、いうことに、したいのだったな。」
8
9★軽くなだめるようなキス
10
11「くちゅ…っん…っ、はあ…っ、
12俺の…目を見ていろ。ああ…手は、そうだな…、
13首ではなく…お前の好きな、俺の耳に触れているといい。
14…落ち着くだろう？」
15

「ん、それでいい」

「はあ…っ、はあ…っ、今、魔羅の先が、
お前の入り口を何度も擦って…っ、はあ…っ、
はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
ん、…入れる、いれ…る、ぞっ、はあ…っ、
お前の…っ、なか、に…っ、ん、ンんッ、んッ！ん、う！（挿入）」

「はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
き…っ、つ、はあっ、はあっ、はあっ、

力を抜け、ほら…っ、んっ、これでは、入るものもはいらない…だろう…っ、
はあっ、はあっ、はあっ、
んっ、まだ、先しか入っていない…っ、
はあっ、はあっ、はあっ、もっと…ッんっ、深く、まで…ッはあっ、はあっ、

1 はあっ、あ…ッあっ、んっう…ッく…ッ！
2 はあ…ッはあ…ッはあ…ッ」
3
4 「ああ…ッはあっ、はあっ、食いちぎられそうに…ッんッ！　狭いな…ッ
5 はあっ、はあっ、…苦しいか？
6 随分…ッんっ、中が、強張って…ッいるようだ…ッんっ、はあっ、」
7
8 ★強張りをなだめるように、口内をかき回すキス
9
10 「ッんっ、はあっ、はあっ、
11 …ほら、もっと…ッんっ、気を、楽にしろ…っ、はあっ、
12 んっ…ああ、口づけると、少し中が、和らぐな…」
13
14 「はあ…ッはあ…っ、ん…、
15 まだ…ッんっ、魔羅の半分ほどだが…ッはあ…ッ、

これ以上は、入れないから…ッ、はあ…っ、
今は、な…ッんっ、
ほら、動くぞ…っ、んっ、まずは、ゆっくりと…っ、はあ…っ、
中を慣らしてやる…っ、んっ」

「（ゆっくりとした抽送にあわせた喘ぎ）
はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
ん…っ、はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
っ、…う、…、はあ…っ、中、が…ッ、んッ！
大分…っ、んっ、絡むっ、ように…っ、はあっ、なってきた…っ、はあ…っ、
はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、…もう…っ、ぅ、ん、んっ！
はあっ、はあっ、俺の…っ、魔羅をっ、はあっ、覚えて来たか…？」

「ん…、はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
ああ…っんっ、ん、ああー…ッはあー…っ、はあー…っ、

ああ…いい…ッはあ…っ、

はあ…っ、お前の…っ、んっ、お前の…ッ、はあッ、ナカ、だ…ッ
はあ…ッ、はあ…っ、
俺が…っ、はあっ、はあっ、はあっ、どれだけ…っ
…っ、はあ…っ、はあ…っ」

「はあ…っ、はあ…っ、ん…っん、ん…っ、はあ…っ、動くぞ…っ、
はあっ、はあっ、はあっ、んっ、お前の…ッ、んッ、ナカで、
俺の、魔羅を…っ、はあっ、はあっ、味わって、覚えるんだ…っ、
はあっ、はあっ、はあっ」

「（ピストンのスピードを上げて、唸り声を混ぜながら）
んっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、
あ…っ、ああ…っ、ぐ…っ、んっ、

ああ…っ、はあっ、はあっ、
お前も…っ、んっ、気をやりそうだな…っ、
はあ…っ、はあ…っ、『ほと』の中が…っ、んっ、
うねってきたぞ…っ、

はあっ、はあっ、はあっ、
さあ…ッんっ、いくといい…っ、
はあっ、はあっ、はあっ、
俺の魔羅で…っ、はあっ、はあっ、
いくんだ…っ、はあっ、はあっ、はあっ」

★キスと共に絶頂に向かわせるように、一気に駆け上がる

「んっ、んっ、んん、ぅ、んん…っ！」

1　ヒロイン、絶頂
2
3　「（まだ銀は達していないため、絶頂に向かって激しく腰を振る）
4　はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、
5　ああ…っ、はあっ、堪らないな…っ、
6　俺で…っ、はあっ、はあっ、気をやる、姿を、
7　見る事が出来るなんて…っ、はあっ、はあっ、
8　ああ…ッ、はあっ、はあっ、はあっ、
9　はあっ、…っ、んっ、もう…っ、
10　はあ…っ、も…ッ、んっ、出そうだ…っ、
11　はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、
12　この、白い腹の上に…っ、んっ、出す…っ、はあっ、はあっ、
13　ああ…っ、出る…っ、んっ、
14　んっ、はあっ、出る…っ、う…っ、ぐ…ッんっ、んんっ！（射精）」
15

《4．告白 ～お前を、抱きたい～》

（トラック3の続き、一回戦終わったところから）

（上から見下ろす）

「はあ…っはあ…っ…おい、のびている時間はないぞ…？

俺の一夜を買ったんだろう。…まだまだ夜は長い。

あけがらすの声がするまで、たっぷり味わわないと勿体ないだろう？

俺を金子で買うなら、

将軍様だって金庫を半分は空にしなきゃならないだろうからな」

「ほら、身を起こせ、もう一度…ッ、ん…？

はっ……お前、これ…布地に、血が……。

まさか、初めてだったのか…？」

1 （体を引き正面から見る）
2 「いや…しかし、…お前、将軍の…大奥に、いるんだろう？
3 何で…っ、はあ…いや、落ちつこう…。
4 お前が…あらばち…初めて、だったのは、確かなことだな…」
5
6 「…はあ…、すまない、
7 ことの最中に初めてだと言われるたびに、
8 嘘だと思って、頭に血を上らせていたのは俺だ…
9 どういう、ことなのか教えてくれ」
10
11 ヒロイン：説明する
12
13 「…つまり、お前は大奥に入っていたのに
14 将軍の手はつかなかったということか？何で。
15

…身分が低かったから？ そういう、ものなのか。
確かに、大奥には大勢の女が入っていると聞く。
だが、お前は、武家の娘だろう？
それに…どれだけの女がいようと、目を引くほど…その…。

（少し照れたように）
…その、お前は、本当に綺麗になった。
花魁道中の見物に集まった、たくさんの見物客の中からでも、
…俺が、一瞬で目が惹きつけられるほどだった」

「…は？ 大奥では、顔に泥を塗っていた？
な…んだそれは…
ふ…ッふは…ッはははっ
よくそんな技を考え付くな。
…ああ、兄上の知恵か。

1
2 …だが、泥程度でお前の綺麗で…可愛らしい顔立ちを見落とすとは、
3 将軍様も見る目がない。
4 …お前に手をつけられる器じゃないということだな」
5
6 ヒロイン:「不敬と言われるよ」
7
8 「…この程度、いいだろう?
9 ここでの話は、お前と俺しか聞く者はいないんだ。
10 それに、将軍は、将軍である前に俺の…
11 ただ一人、恋しい女を掻っ攫った男だ」
12
13 (キスできるぐらいの距離に顔を寄せ)
14 「(真剣な声音で)
15 …聞かせて欲しい。大奥に入ったのは…お前の意思だったのか」

「（ヒロインに説明を聞いたのち）
…他の男との縁談を避けるために…ああ、なるほど。
それもまた、兄上の策略なのだな。
…お前がその身を守った事はわかった。
…お前が、そうまでして縁談を避け、
大奥で身を隠すようにしてお手付きを逃れ、
…何故…、今ここに、俺の目の前に現れたのか…」

「聞かせてくれ。…俺に…、
幼い頃の、お前との約束を阿呆みたいに、ただただ、抱え続けてきた男に、
どうか、…教えてくれ…ッ」

ヒロイン:「銀太が好きだから」

（ヒロインを抱きしめ、耳元で）
「…っ、…はあ…、俺も…お前が…ッお前が、好きだ。
今も昔も、お前だけが、俺の…生きる理由、なんだ…」

（ヒロインの顔を覗き込みキス位置）
「…現金なものだな、
いつも空っぽの身の内が…、
お前に会った途端に、忙しないほど色とりどりに満たされる。
やるせなさ、動揺、嫉妬…そして、どうしようもなく恋焦がれる思い。

…お前は、俺の感情というものを、持って戻ってきてくれたのだな…。

（感無量の深い息）
はあ…ッ」

（抱きしめて耳元で）
「…大奥には、いつ、戻る。
…こうして、お前に思いを告げられたんだ。
せめて、戻るまでの間だけでも…。

…戻らない？
宿下がり…というのは、正式に奥を抜けたということか…？」

（再び顔を覗き込み）
「俺には、そう言ったことに明るくないが…
宿下がりが認められるというのは、大ごとじゃないのか。
それほど、母上の具合が、芳しくないということか？

…そうか、大事ないなら良いが…。
だが…そうか。

宿下がりをしたということは、お前が逃れたはずの、
他の男との縁談が避けられない、と、なったわけだな」

「…ああ…泣くな。
…そうか、他の縁談を受ける前に…今日は、
せめてもと俺の花魁道中を見に来たんだな…」

「…俺は、お前が奥に入ったと聞いた時から…ずっと抜け殻だった。
だから、事情も知らずに…
すまない。お前の思いを、ないがしろにした。」

「…お前をもう、どこにもやりはしない。
こうして、俺の元に来たんだ。
…お前を、俺だけのものにする」

「…どうか、…もう一度…お前を、抱かせてくれ。

…男女のこれが、初めてだったというのに…
お前に、怖い思いをさせてすまなかった。仕切り直したい。
…お前を、もう一度腕に、抱かせて欲しい」

「…手が震えてる？
ははっ…ああ、本当はさっきも震えていたんだ。
どういう形であれ、お前に触れられると思うと…
昂奮して…、だが同時に、緊張して…っ、はあ…ッ、畏れている…」

（抱きしめて耳元で）
「俺は、たくさんの女を抱いた。
…牙原一の花魁となって、お前の憧れを手にし、
金子も蓄えて…、お前を迎えに行くつもりでいた。

1　その為の手段ではあったが…
2　身に着けた芸事にも、技にも…
3　この、仕事にも、誇りがある」
4
5　「だがそれでも、俺の身体は他の女の手がついている。
6　それが清らかなお前を…穢(けが)すんじゃないかと。不安で…緊張する」
7
8　ヒロイン:「銀太が頑張った証でしょ。そんな風に思わないよ！」
9
10　「…はあー…お前は、そう…言ってくれるが、それでも…
11　あまりにも違うんだ、お前を…抱く、ということは…。
12　この胸に触れてくれ、
13　…心の臓が飛び出していきそうなぐらい、跳ねているだろう」
14
15　（抱きしめられてヒロインの耳元で）

「…ッん、だ…きしめて、くれるのか。

（感極まって、思わず泣きそうになるのをこらえ）

はは…ッ…っぐ、…ふ、…ッはー…ッ、まったく…ッ、

顔の筋が凍り付いたように動かない花魁、とまで言われていた、

この銀を、泣かせるとはな…」

「…お前を、抱きたい。…お前の、その身のすべてを、包んで…

どうか、もう一度、…お前が俺のものだと、確かめさせてくれ…」

《5．相愛 ～隠すな。俺だけのものなのだろう？～》

（トラック4の続き、行為に突入。再び、畳に押し倒した正常位の態勢から）

（上から覆いかぶさっている）

「…まさか…その、口づけも、初めてだったのか？

ああ…惜しい事をした。もっと、堪能するべきだったな…」

（ぐっと顔を近づけて）

「（★軽い触れ合う口づけ）

顎をあげて…ちゅっ…口づけは好きなんだな、…ちゅっ…

ん？ 何だ…？ 銀太の顔が近くで見られるから…？

くすっ…はあー…ッそうか、…ちゅっ、

愛い事を言う…ちゅっ、ちゅっ」

「俺も…
焦点がぼやけて…
鼻も、まつ毛もぶつかりそうなこの場所から、
お前を見るのはとてもいい。…思わず…ッはあ…ッ
ロづけの加減が利かなくなるほどに…ッん…ッ」

★我慢できずに深いキス

「っはあ…っ、はあ…っ、
ん…っ…くす、顔が熟れたように赤いぞ。
…隠すな。俺だけのものなのだろう？
ちゃんと、見せていてくれ…、」

★唇、頬、顎のライン、首筋、と徐々にキス位置を下げていく

（胸元なのでやや低い位置から）
「（★言葉の合間に、胸のラインに何度もキスを落とす）
…随分成長したな、ん、
お前の胸だ。ほら…ちゅっ…、はあ…っ、
こうして唇を寄せると、ふるふると愛らしく揺れる…、
ん…っんっ、ちゅっ、ちゅっ…」

「はあ…っ、柔らかいな…、はあ…っ、
ちゅ…っ、ちゅ…っ、れろ…、
んん、くすっ、口づけは許すのに、舐められると慌てるのか…？
くすくす、はあ…、…こんなに物慣れぬお前に、
随分荒々しい真似をしたものだ…、

（囁く様に言ってから、胸のキス、舐め、と繰り返し）

今度はゆっくりと…、追い上げて、気をやらせてやる…、
ちゅ…っ、ちゅ…っ、……」

「なあ…、その…、ん、
痕を…残しても、良いか…？
少し痛むかもしれないが、ここに…、

（舌を差し出し、見せつけるように胸、乳輪の脇あたりを舐め上げる）
れー…お前のこの…ッはあ、白い胸に、俺の痕を…残したい…っ、
ちゅっ…」

ヒロイン：「いいよ」

「（★キスマークを付ける）
ん…、ありがとう…、はあ…っ、では…、ん、んっ、ぢゅう…っ

ん…っ、んっ、はあ…っ、ほら、お前の胸に、赤い花が咲いた…、
俺の、咲かせた花だ…」

「はあ…っ、夢のようだな…、お前の…っ、んっ、体に、
俺の痕を刻める日が、来ようとは…、

（つけた痕をいとおしむようにキスして舐め上げ、そのまま二、三のキスマークに）
はあ…っ、ちゅっ、れる…もう、一つ…っ、
ん、ちゅっ、ぢゅううう…っ……」

「ああ…、お前の、この胸の先も、ぽってりと熟れてきた…っ、
はあ…っ、ここを、弄った事はあるか…？」

「ん、首を振ったが…
くす、嘘だろう？

ほら…指で弾くと、びくりと腰が跳ねる。
…ここが良いのを知らないと、こうはならない。

（嫉妬の滲む少し怖い声で）
…まさか、ここだけでも、誰かに弄られたことがあるのか？」

ヒロイン、首をふる

「ない、のか…、（安堵の溜息）はあ…ッ
では…、自分で弄っていた、ということだな…？
はあ…っ、想像するだけで、魔羅が暴走しそうだ…っ、はあ…っ」

「…己で触って…この、胸の先だけで、気をやったことは…？

くす、それはないのだな。はあ…っ、わかった、ならば…

1
2 （乳首に息吹きかけ）
3 ふう…ッ
4 愛らしいここを…っ、はあ…っ、たっぷりと可愛がって…、
5 気をやる良さを、教えてやる…」
6
7 「（★乳首に触れるだけのキス）ん…っ、ちゅ…っ、ちゅ…っ、
8 ほら…こちらを見ていろ、俺の舌が…れ、お前の、ここを舐めるぞ…、」
9
10 ★乳首舐め、可愛がるようにちゅぱ音を立てて
11
12 「ん…っ、はあ…っ、はあ…っ、痛みは…、
13 くす、ないようだな…、はあ…っ」
14
15 「（反応が良いヒロインに、余裕の揶揄いを混ぜながら）

16 くすっ、…ほら、顔を、隠すなと言っただろう？
17 俺に…っ、はあ…ッ、見せてくれ、全部、お前が…っ、はあ…っ、
18 俺に愛でられて、気をやる様を…っ、はあ…っ、全部…っ、ん…っ、」
19
20 ★再びの乳首舐め、さっきより濃厚に、熱心に、汁気たっぷりで
21
22 「はあー…ッはあー…ッはあ…ッ
23 ああ…、はあ…っ、もう少しだ…っ、はあ…っ、
24 あとわずか、…俺に、この…、愛らしい胸の先を舐められれば…、
25 お前は、味わったことがない程…心地よく気をやることが出来る…、
26 はあ…っ、俺に…、身を任せて…、」
27
28 ★激しく、がっつくように乳首舐め
29
30 「はあ…っ、ほら、体が震えてきた…っ、

1 んっ、じゅっ、ぐちゅっ、んっ、
2 俺が見ていてやるから…ッはあ…ッ、
3 さあ…、いけ…っ、」
4
5 （★一気に絶頂に向かわせる乳首舐め）
6 ちゅうっ、ちゅっ、ん、んっ、んんんっ、
7 じゅううう…ッ（ヒロイン絶頂）」
8
9 「…っはあ、はあっ、はあっ、はあっ、
10 ああ…っ、上手に気をやれたな…？
11 ちゅっ、はあ…っ、ほら…、俺の舌で愛された、お前の胸の先は…
12 こんなに赤くなって、はあ…っ美味そうに実っている…っ、
13 はあ…っ、はあ…っ、ああ…っ、はあッ、はあッ、
14 可愛らしいな…ッ、はあ…っ、はあ…っ」
15

（クンニ位置までしゃがみ）
「はあ…っ、本当ならば、右の方も弄ってやりたいが…っ、
はあ…っ、俺もっ、んっ、はあっ、
気が急いているようだ…っ、はあ…っ、
さっき、いじめてしまった、『ほと』の方を早く、可愛がってやりたい…、
はあ…っ、はあ…っ
足を…開いて、
そうだ…っ、んっ、怖がらなくていい、もう、痛むことはしない」

「…ああ、ちゃんと、淫水がたっぷり溢れている…っ、
ん？ 何故隠そうとする。

…ああ…、すまない、
さっき、意地の悪い事を言ったのは、はあ…っ、醜い嫉妬だ…」

1 「幼い頃から、ずっとお前のことを思って、自分を慰めていたのに…、
2 他の男が触れて、こうも愛らしい様になるよう、躾けたのだと思うと…、
3 はあ…ッ…すまなかった…。
4 今ならば、
5 俺の手で、…こうまで感じてくれたのだと、ちゃんとわかっている」
6
7 「はあ…ッ
8 ぱくぱくと口が動いて…本当に愛らしい…ッはあ…ッはあ…ッ
9
10 （★引き寄せられるように入り口を舐め上げる）
11 ああ…お前の淫水の味は…ッはあ…ッひどく昂奮する…ッはあ…ッ
12 お前が…ッんっ、女になった匂いが堪らない…ッはあ…ッはあ…っ」
13
14 ★ここから一気にクンニ、しゃぶりつく様に
15

「はあっ、はあっ、はあっ、…んっ、舐められるのは怖いか…？
はあ…っん、よかった…、
ならば…もうすこし…」

★再びのクンニ、汁気たっぷりにがっつく

「はあっ、はあっはあっ、はあっ
ああ…ッはあ…っ、はあ…っ、たまらないな…っ」

（上から見下ろす）
「お前を…っ、はあ…っ、前にすると、俺の魔羅は…ッはあ…っ、
壊れてしまったかのように、萎える事を知らなくなる…っ、
はあ…っ、はあ…っ、わかるだろう、お前のこの、
白い太腿の上に擦っているものが、どれほど煮えたぎっているのか…っ、
はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ」

1　（顔をぐっと寄せ）
2　★唇に軽くかき回すようなキス
3
4
5　「はあっ、…お前の中に、
6　今一度…っ、はあ…っ、入っても良いか…」
7
8　「痛みの無いように、ゆっくりとする…、
9　はあ…っ、はあ…っ、お前と…っ、
10　はあ…っ、一つになりたい…っ、はあ…っ、許して、くれるか…っ？」
11
12　ヒロイン、頷く
13
14　「…よかった、無理は…ッはあ…ッさせない…ッ、
15　（★口内を軽くかき回すようなキスをしながら、挿入へ）

ん、んんっ、う…ッ」

「はあっ、はあっ、カ、抜いてくれ…っ、
んっ、んんっ、あ、ああっ！ ああっ！」

「はあー…っ、はあー…っ、
はあ―…っ、はあー…っ、ああ…っ、んっ、
もう少しだ…っんっ、もう少し…っ、
はあっ、はあっ、もう少し、
中…っ、まで…っ、ん、ぐ、あっ、あっ！」

「はあっ、はあっ、はあっ、
一度止めよう…っ、はあっ、はあっ、はあっ、
ああ、変わらず…っ、んっ、
きついな…っ、はあっ、はあっ、はあっ、

1 ん…ッ苦しくはないか…っ、はあ…っ」
2
3 「あ、ああ…んっ！ 俺は…っ、はあ…っはあっ、
4 天にも…っんっ、上るほど、いい…っ、はあ…っはあ…っ、はあ…っ、
5 ああ、そうだ、さっきも…ッ、
6
7 （★口内をかき回すようなキス）
8
9 はあっ、はあっ、はあっ
10 ははっ、はー…ッんっ、
11 ああ…ッこうしているだけで、魔羅に…っ、はあっ、はあっ、
12 絡んで…っ、んっ、
13 タマの中身を、吸い上げられるっ、かの、ようだ…ッ
14 はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ！」
15

「ん？　何だ…？
はあ…っ、ああ…っ、ん、今、半分ほどだな、入っているのは…、
仕方ない、
お前のここは小さいし、まだ、慣れていない、これ以上飲み込むのは…」

ヒロイン:「全部ほしい」

「…いや、駄目だ。俺の、魔羅の大きさわかっているだろう？

これ以上は、お前の体の、負担になる。
俺は、十分に良いから…っ、ん、んっ！
はあッ、こら…っ、んっ、
今、腹に力を入れるな、そんなことをして、はあっ、
お前が苦しいだろうに…っ、はあ…っ、はあ…っ」

1　ヒロイン、泣き出す
2
3「あ、ああ…泣くな、何で…っ、
4駄目だ、駄目だ駄目だ、さっきも言っただろう？
5お前の身体が、辛くなるから…、…良いわけがない…、はあ…っ、
6
7何でこんなところで、強情なんだ…、
8はあ…っ、ああ…っんっ！はあ…っ、
9まったく…、男の俺が耐えているというのに…、はあ…っ」
10
11　ヒロイン：「銀太…」
12
13「…くそ、
14こんなところで、銀太と呼ぶな…っ、はあ…っ、はあ…っ、」
15

ヒロイン:「銀太の好きなようにして…」

「好きなように、など、
お前…っんっ、はあっ、はあっ、はあっ、
俺を…っはあっ、
この牙原一の花魁を…っ、はあっ、
煽るとは、良い度胸だな…っ、はあっ、はあっ、

そうまでいうなら、もう耐えるものか…っ!
はあっ、はあっ、はあっ、入れるぞ、
魔羅の根元まで、しっかりと、食え…っ、
ん、ん、お…っ、あっ、あっ、あああっ!」

「はあっ、はあっ、はあっ、わかるか…っ、
ほら、お前の『ほと』の口に、

1 俺の縮れ毛が擦れている…っ、
2 はあっ、はあっ、ああ…ッ、
3 お前の中は、上手に俺を飲み込んだな…っ、
4
5 ん、う、はあっ、ああ…ッ
6 あ、絞り…っ、はあ…っ、上げられる…ッ、
7 ん、んっ、う、っんんっ！」
8
9 「はあっ、動くぞ…ッ、
10 はあッはあっ、このまま、お前の子宮(こつぼ)を…っ、
11 俺の鈴口で、擦りあげて、
12 揺らしてやる…っはあっ、はあっ」
13
14 「（奥だけをつくピストン開始）
15 んっ、んっ、ふっ、

はあっ、はあっ、はあっ、
こうして腰をっはあっ、はあっ、
びたりと…ッんっ、はあっ、はあっ、
つけたまま、中だけ揺らすとっ、はあっ、はあっ、
堪らないだろう…っ、んっ、んっ、
はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、俺も…っはあっ、
はあっ、これほど…っ、はあっ、滾ったことが無い…っ、
んっ、はあっ、はあっ、
ああ…っ、ああ、いい…っはあっ、はあっ、はあっ」

「（★口づけ、荒い息の間に）
ちゅっ、じゅるっ、じゅっじゅるるっ、んっ、はあっ、はあっ、
も一度、俺の…ッはあっ、名を、呼べ…っ、
呼んでくれ…っ、
銀太だ、

1 お前の…っ、はあっ、はあっ、銀太、だ…っ、はあっ、はあっ」
2
3 「はあっ、はあっ、お前の事を…っ、んっ、はあっ、
4 もう、失ってしまったかと思っていた…っはあっ、はあっ、
5 二度と、手に入らないのだとっ、んっ、思っていた…っ、はあっ、はあっ」
6
7 「好きだ…っ、はあっ、はあっ、愛している…っ、
8 はあっ、はあっ、愛している…っ
9 もう…っ、はあっ、はあっ、
10 いく…っ、いこうっ、んっ、共にだ…っ、
11 はあっ、はあっ、ああ…っ、あ、い、く…っ、
12 はあっ、いく…っ、はあっ、はあっ、いく、いく…っ！
13 あっ、ぐ、はあっ、ああ…ッああっ！
14 （絶頂）」
15

《6．朝 ～それから～》

（トラック5で意識を失ったヒロインが、目を覚ましたところから。銀は、ヒロインの隣に並んで、上半身を起こしている）

（やや上から、見下ろすように）

「（甘く優しい声で）

…起きたか。

そろそろ、夜が明けるぞ。…ほら、あけがらすが鳴いている」

「一夜の夢はもうしまいだな。…お前はうつつに戻る時間だ。

兄上には先ほど、遣いをやった。

もう暫くしたらお前を迎えに来るよう、伝えにいっている」

（起き上がったヒロインに顔を近づけ）

「…ん、どうした。今にも泣きだしそうな顔だ。
手を伸ばして…
ああ、また、俺の耳に触れたいのか」

（さらにキス位置まで顔を寄せ）
「くす、好きなだけ触るといい。

昔からお前は俺の耳に触れるのが好きだったな。
ほら…昔に比べて、ちゃんともふもふになっただろう？

もふもふと言うより、すべすべしている？
ははっ、…そうだな。そうかもしれない。
…幼い頃のお前に触れられてから、誰にも触られていないから、
そういう感想を聞くのも初めてだ」

「ああ。…客にも、誰にも触らせたことは無い。
…お前が始まりで、そして終わりだ。
生涯、他の誰にも、触れさせるつもりはないよ。
おいで、さあ…まだ最後のあけがらすが鳴くまで時間がある。
それまでは俺の腕の中で、過ごしてくれ。」

「…何で泣いている？」

ヒロイン:「これで終わりなの？」

「終わり？…そうだな、夜の夢はこれで終わりだ。
…夢を終えて…俺も、うつつに踏み出すから。
顔を見せて」

（ぐっと顔を寄せキス位置）
「…俺は、もうお前を、手放すつもりはない。
牙原遊郭一の花魁、銀（しろがね）の着物を脱いで、…銀太がお前を攫いに行く。
…お前に、俺が練り歩く、最高の花魁道中も見せてやれたしな。
もう、牙原に思い残すこともない」

「先に言っただろう？
俺が今まで牙原にいたのは、
お前に、最高に素敵で、格好いい花魁道中を見せてやることと、
金子を稼いで成り上がることのためだと。

見世に、育ててもらった金を返しても、あまりは十分にある。
昔、話に聞いていた、一国の主ほどではないが、
…将軍様の奥で、顔に泥をつけるより、余程良い暮らしをさせてやれるぞ」

（耳に唇をつけて）
「（感無量の深いため息）はあー…。
…俺と、共に暮らそう。
何度でも、夜を過ごして…この、あけがらすの声を共に聴きたい。
…最期の時まで、お前と共に…」

（了）